

言語形式のメタ心理的機能：「のに」の場合*

松尾 貴哲

1. はじめに

本稿は、(1) や (2) に見られるような、日本語の接続表現「のに」の機能と意味を関連性理論 (Relevance Theory) の枠組みで考察するものである。「のに」発話を「PのにQ」というスキーマでとらえ、Pと関連のある想定をP'として分析し、P発話とQ発話間の推論関係を明示的に示す談話連結語として、「のに」はどのような推論関係を指示するのかを考察する。

(1) やめたいのに、やめられない。

(2) (結果が自分の望むようなものではなかった場面で)

一生懸命やったのに。

辞書的意味の「のに」は、先行発話と後続発話との間に矛盾関係を生じさせ、予期される事柄とは反対の事が起こったことに対する話し手の残念・意外な気持ちが伝わる表現と記される。(1) では、話し手は「やめる」ことに対して強い意志を持っていたにもかかわらず、後続発話の「やめることができない」という事実によって、話し手の意志が崩れてしまうことによる無念さが伝わってくる。文末使用の例である (2) は、後続発話は非

明示的ながら、話し手の思い通りの結果が得られなかったと解釈されると同時に、落胆の感情が伝わることとなろう。

先行発話と後続発話の間に何らかの矛盾関係を構築させるという「のに」の見解は、矛盾関係を構築する逆接の「けど」と多くの場合で交換可能であるという事実を反映する。(3)、(4)のペアを見てみる。

(3) a.鈴木さんは関西出身なのに、標準語を話します。

b.鈴木さんは関西出身だけど、標準語を話します。

(4) (出かけようとしている息子に対して)

a.朝ご飯の仕度ができたのに。

b.朝ご飯の仕度ができたけど。

しかし、「のに」が残念な感情を伝達する点で、伝達される話し手の真の意図は(3a)と(3b)でそれぞれ異なるのは言うまでもない。加えて、「のに」発話それ自体に聞き手の伝達したい意図が込められている、すなわち「のに」発話をもって発話が完結しているものと感じることに、両者の決定的な違いがある¹¹⁾。(4a)は朝食をとらない息子に対する母親の何ともやりきれない気持ちが伝わるが、(4b)の「けど」発話では、「朝食を食べないで出かけるのか」といった想定を伝える発話が続くことを期待するであろう。

さらに(5)や(6)では「けど」との交換が認められず、「のに」の方が好ましいと感じる。

(5) a.春なのに、お別れですか。

b. ? 春だけど、お別れですか。

(6) A: あの二人は別々の人と結婚しようとしているのよ。

B: a. (あの二人は) 愛し合っているのに。

B: b.? (あの二人は) 愛し合っているけど。

本稿では、この「のに」がもつ残念・不快感、そして「のに」節で発話が完結すると解釈される事実はどこからくるのかについて考察する。本稿は以下の二点において、「のに」は関連性を有すると論証する。(i) Pの解釈された想定から導き出されるP'に対する話し手の信念が、Qと矛盾関係にあることを聞き手に教える²⁾。(ii) P、Q双方とも話し手の伝達したい想定ではあるが、話し手が、聞き手がQを既に知っている情報であるとして捉え、Pをより訴えようと意図している、すなわちPを話し手の結論として解釈するように、聞き手の推論方向をポイントする。また、無念さ・落胆の感情は、本分析の副産物として伝達されることも示したい。

2. 発話解釈と関連性

Sperber&Wilsonによって提唱された関連性理論は、人間のコミュニケーションと発話解釈についての一般原理、そしてその解明を目指した理論である。関連性理論の特徴は、人間に備わっている2つのモジュール、すなわち、あらゆる行動の基盤として機能する認知的側面と、発話の言語情報に基づいて統語的意味論的演算を行う言語解読的な側面とを明確に区別した点である。発話解釈が両モジュールの相互作用によって行われる見解は、Grice (1975) の推論モデルを修正・発展させたものであり、発話解釈のメカニズムを人間の認知活動に求めることを意味している。

2-1. 関連性理論の基本的想定

関連性理論によると、我々の認知は「最大の関連性を目指す」という傾向を持ち、発話解釈は関連性の諸原理に保たれて行われる。関連性理論ではこの傾向を普遍的な人間の認知原理としてとらえ、「関連性の第1原理」を規定する。

- (7) First or Cognitive Principle of Relevance (関連性の第1、認知原理) :
Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.

(人間の認知は関連性を最大にするように稼動する傾向を持つ)

(Sperber & Wilson 1995 ; 262)

(7) で記される関連性 (relevance) とは、認知効果 (cognitive effect) と処理労力 (processing effort) の兼ね合いによって定義される相対的概念である。関連性の認知原理に制御される我々は、最適な関連性を追求するにあたり、もっとも労力の少ない解釈ルートを選択し、適切な効果を得ようとする。言い換えれば、ある情報 (ある発話) の認知効果が高ければ高いほど、またそれを生み出すために犠牲となる処理労力が少なければ少ないほど、関連性は高まるとされる。

「最小の労力で最適な効果を得ようとする」という我々の認知傾向は、ことばを介したコミュニケーションのレベルにどのように作用するのか。基本的に発話行為というのは、話し手がある情報を聞き手に伝達することである。具体的に述べると、話し手は、伝達する情報を持っているという意図「情報意図 (informative intention)」に加え、その情報が聞き手の注意を十分に惹くものであることを知らしめたいという意図「伝達意図 (communicative intention)」も同時に持っているはずである。すなわち発話というのは、上記の情報意図と伝達意図が備わったものと定義され、関連性理論ではこれを「意図明示的伝達 (ostensive communication)」と呼んでいる。このことから、関連性の第二原理つまり伝達原理として (8) が規定される。

- (8) Second or Communicative Principle of Relevance (関連性の第2、伝達原理) :

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

(全ての意図明示的伝達行為は、それ自体が最適関連性を持つことを見込んでいる)

(Sperber & Wilson 1995 ; 271)

(8) が意味しているのは、あらゆる発話は聞き手にとって認知効果があり、さらにそれは最適な関連性を保証しているというものである。この最適関連性は2つの側面から定義され、(9) に規定される。

(9) Presumption of Optimal Relevance (最適関連性の見込み) :

(a) The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.

(意図明示的な刺激は、聞き手がそれを処理するための労力を払うに値する程の十分な関連性を有する)

(b) The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preference.

(意図明示的な刺激は、話し手の労力と関心に一致する範囲内で、最も高い関連性を有する)

(Sperber & Wilson 1995 ; 270)

関連性の認知原理に制御されている話し手は、自分の意図した解釈を伝達するにあたり、聞き手にとって最も復元しやすい言語形式を選択し、聞き手の労力を軽減しようと努める。一方の聞き手は、あらゆる発話が最適な関連性を見込みを伝達しているのであるから、幾分の処理労力を犠牲にしても、話し手が注目に値する程の情報つまり適切な認知効果を得られる情報を与えているのだと期待することになる。言い換えれば、聞き手は話し手に、発話を処理するための労力が最小のルートを辿るように仕向けられているのであり、聞き手が不当な労力を課することなく復元した最初の解釈こそが、話し手のもっとも意図した解釈であると見なす。そして当該発話の解釈作業はストップし、結果として聞き手は最適な関連性を達成し

たと考えるのである。この諸原理こそ、関連性理論の中核を占めるものである。

2-2.表意と推意

Grice以降の語用論は、発話の言われたこと “What is said” と暗に意味されたこと “What is implicated” の区別に研究の焦点を合わせてきた。しかし、関連性理論はGriceの考える “What is said” とは異なり、発話の明示的側面の復元にも推論が関与するとしている。たとえば (10) (11) などは話し手の意図した表示のほんの一部でしかなく、発話の明示的側面を完全に同定するには、言語的解読だけでは成され得ない。この現象を関連性理論では「言語の意味確定度不十分性 (linguistic underdeterminacy)」と呼んでいる。

(10) (夜遅くまでテレビを見ている子供に対して)

母親：言うこと聞かないのね。

子供：だって。

(11) じゃあ、僕はアイスコーヒー。

聞き手は数々の意味拡充 (enrichment) という語用論的解釈作業を経て、発話の表出された命題、つまり表出命題 (proposition expressed) を復元する。その表出命題がそのまま伝達されれば、表意 (explicature) となり、コンテキストによっては発話の裏の意味である推意 (implicature) が導出されることとなる。表意は語の記号化された意味と特定のコンテキストにおける話し手の語用論的推論との相互作用で導出される。その過程は、解釈者つまり聞き手が真偽を問える完全な命題を構築するまで、すなわち適切な認知効果を得るまで拡充がなされる。一方で推意は純粹に推論のみによって導出される。これら表意、推意の復元プロセスを (12) の例で具体

的に見ていく。

(12) Utterance : Mary told John that she was tired.

(13) Logical form : X told Y at t1 that Z was tired at t2.

(14) Proposition expressed : Mary Green told John Smith at 10:00p.m.
on November 30 2006 that John Smith was tired at 10:00 p.m.
on November 30 2006.

(15) Implicature: Mary does not want to go shopping with John.

(12) の発話から音韻的、統語的演算、つまり言語的解読を行って獲得した (13) の論理形式 (logical form) は、意味確定度が極めて低く、命題の真偽を問うことが出来ない。そこから聞き手は関連性の諸原理に統制されて意味拡充を行い、話し手の意図した (14) のような表出命題を同定する。さらに、これらの推論プロセスはオンライン作業であるとされ、(15) のような推意を復元するには、適切な表出命題が同定されていなければならないとされる (武内 2002)。

2-3. 二種の記号化：概念的意味と手続き的意味

上記のように、発話の論理形式に含まれる語は、大概において原子的概念を持ち、(12) では “told” “tired” などが「概念を記号化している (conceptual encoding)」と言える。概念を記号化する語が命題の形成に貢献するというのは異存がない。しかしながら、発話の言語形式を語用論的推論過程へのインプットと見なす関連性理論は、語の意味に関して独自の意味論を持つことになる。Blakemoreがはじめて指摘したように、so、after allなど、表出命題の同定には貢献せず、各命題がどのような関係に

あるものとして意図されているかを指示する、すなわち話し手が意図した解釈へと推論的道筋を提供する意味を記号化した語が存在する。これを「手続きを記号化している (procedural encoding)」、つまり手続き的意味と呼ぶのである。(16) と (17) を見てみる。

(16) a. Tom can open Bill's safe.

b. He knows the combination.

(Blakemore 2000, 476)

(17) a. Tom can open Bill's safe ; so he knows the combination.

b. Tom can open Bill's safe ; after all he knows the combination.

(17a) のsoの使用により、聞き手は、先行発話「トムはビルの金庫を開けることができる」は、後続発話「トムは鍵番号の組み合わせを知っている」に対して証拠を提示しているものと解釈する。一方 (17b) のafter allでは「金庫をあけること」ことが、「組み合わせを知っている」によって証拠を与えられていると解釈することになる。このように、soやafter allのような談話連結詞は、それ自体は発話の論理形式を形成せず、真理条件に関与しているとは言えない。代わりに、聞き手がどのような推論を行うことを期待されるかを指示することによって、解釈の推論的側面に制約を課す機能を有していると考えられる。すなわち、このような語は、意図された認知効果を生み出す方向に聞き手を導き、全体として必要とされる労力を少なくすることによって、関連性に貢献しているのである。

上記で述べた二種の記号化に従うと、本稿で考察する接続詞「のに」は、so、after all、そしてbutや「けど」と同様に、先行発話と後続発話の関係を推論する道筋を提供する手続きを記号化し、発話の真理条件には貢献しない語と考えられる。「のに」が記号化する手続きによって、聞き手は先行発話と後続発話の関係を不当な労力を得ずに、全体として唯一の解釈を復元することを可能にし、それは結果として「のに」発話の関連性を得ることになるのである。

3. マインドリーディングとメタ表示

3-1. 解釈的表示

2節で概観したように、発話解釈をメンタルプロセスの一環とし、「心のモジュール観」を重要視する関連性理論は、あらゆる発話を話し手の信念や思考、あるいは誰かの信念や思考を様々な類似性をもって解釈的に表示したものと位置づけている。言い換えれば、発話というのは思考の媒体であり、その思考を伝達するのにもっとも類似した言語形式が選択されたものである。すなわち人間の心の状態を純粹に、そして正確に記述した発話は存在しないという独自の視点を、関連性理論は持っている。しかし、話し手が伝達したいオリジナルの表示とその発話が論理的・解釈的に類似していれば、当該のコンテキストにおいて適切な関連性を得られるものとされる。

オリジナルの表示と話し手の解釈的表示との差は、話し手の主観的な解釈が関与しているか否かである。内田（1998）は、日本語の文末助詞「のだ」が解釈的表示であることを明確に記すマーカーであるとし、オリジナル表示の命題に話し手の主観的判断が含まれていることを明示的に聞き手に伝える言語手段の一つであるとしている。（18）を見てみよう。

- (18) a. 太郎が窓ガラスを割った。
 b. 太郎が窓ガラスを割ったのだ。

(18a) は「太郎が窓ガラスを割った」という事実そのものを記述的に伝える発話である。一方の (18b) は、「太郎が窓ガラスを割った」という事象を正確に伝えるというよりは、その事象が話し手の解釈でもって判断し、伝えている発話であると分析される。話し手は「のだ」を使用することにより、低次の表示が話者の判断によるものであることを明示的にしているのである。

3-2. メタ表示

基本的にすべての発話が聞き手の思考の解釈であるという関連性理論の想定は、発話解釈にマインドリーディング (mind-reading) 能力が不可欠であることも意味している。我々は発話解釈にあたり、人間の認知メカニズムの中枢をなす「心の理論機構 (Theory of Mind Module)」を稼働させ、当該の発話から話し手の意図を推測し、命題そのもの、発話、そして話し手の信念・思考を帰属させることを可能にする。外界の出来事を反映する一次的表示から、認知的な解釈として表示するのがメタ表示 (metarepresentation) と呼ばれるものである。

メタ表示とは表示の表示である。Wilson (2000) はこのメタ表示の低次表示を抽象的表示、伝達の表示、心的表示と3種に区別し、Sperber (2000) はこれらを表示する能力をそれぞれメタ論理的、メタ伝達の、メタ心理的と位置づける。そのうち心的表示すなわちメタ心理的能力とは、帰属する一次的表示として、話し手の信念・思考などの認知的表示を担うものである。

松井 (2004) は、日本語の文末助詞「って」が3種のメタ表示的機能を担うものとして捉えている。以下の例を見てみよう。

(19) 名前って、何なの？

(20) A：それで、彼女はなんて言っていたの？

B：あなたとは話もしたくないって。

(21) B：僕のことを嫌いなんだって。

(19) は、日本語の名詞「名前」の音声形式を引用したものであり、他者への帰属性がないことから、低次表示は抽象的表示であり、メタ論理的用法である。一方 (20) と (21) は、オリジナルの発話が存在する故に、他者への帰属性がある。(20) のBの発話は、彼女が発したことばを直接引用

する点で、低次表示は伝達的表示であり、この場合の「って」はメタ伝達的用法になる。(21)は、彼女の発話をBが主観的に「僕のことを嫌いである」と解釈し、さらに「のだ」を加えることで、低次表示が話し手の判断によるものであることを明示的に伝達している。話し手の思考・信念が解釈に加えられているという点で、(21)の「僕のことを嫌いなんだ」は心的表示であり、ゆえに(21)の「って」はメタ心理的用法といえる。

本稿では「のに」は、上記の概念を用いて説明可能とされる。メタ表示の概念に沿って(5)を考えてみよう。

(5) a.春なのに、お別れですか。

我々は、春と別れが相容れない性質のものであるという直感的判断をもっている。この点から、「のに」によって伝わる話し手の残念な気持ちとは、「春であるから別れはすぐわない」といった、話し手の期待が叶わないことへの嘆きを表していると推論されよう。話し手は「のに」の使用によって、話し手の何らかの期待すなわち主観的判断を伝えると共に、それが反してしまうことを聞き手に訴えているのである。

言い換えると、先行発話は「春である」の解釈的表示であり、「のに」の使用によって、「春であるから別れはすぐわない」からの想定（春ならば別れるべきではない）は先行発話の推意として導出され、さらに前述のメタ表示の説明に従えば、この想定は話し手の期待すなわち信念が付与された心的表示として捉えられることになる。「のに」の使用は、聞き手に心的表示「話し手は、春であるから別れはすぐわないと信じている」という想定を先行発話から導出させ、後続発話の表出命題「別れる」と相反する関係になることを教える。この矛盾関係によって話し手の信念が叶わないとされるのであるから、結果として、話し手の残念感が聞き手に伝わると考えられるのである。

4. 「のに」発話の分析

4-1. メタ心理的用法としての「のに」

メタ心理的用法とは話し手の信念・思考などの認識的表示を担うものであり、そこには「話し手の主観的判断」が聞き手の解釈に加えられるものである。「のに」がメタ心理的機能を有する言語表現であるという本稿の仮説に従えば、「のに」は「のに」節の推意に対する話し手の信念と後続発話との間に矛盾関係を生じさせると主張することになる。対照的に矛盾の関係が発話の事象間にあると考えられる「けど」と比較考察することによって、「のに」がメタ心理的機能を持つことが明らかになるであろう。

(22) の「のに／けど」ペア例を考えてみよう。

- (22) a. (会社を) 辞めたいけど、辞められない。
- b. (会社を) 辞めたいのに、辞められない。

- (23) a. 先行発話の命題表示：話し手は「話し手が会社を辞める」ことを望んでいる。
- b. 「けど」節からの推意：会社を辞められるであろう。
- c. 後続発話の表出命題：話し手は会社を辞めることができない。

Blakemore (1987,2002) のbut分析に従えば、(22a)「けど」発話の解釈は、(23) に指示されるような推論プロセスをたどる。「けど」の使用によって、(23a) の表出命題から導出される想定 (23b) が、後続発話の表出命題 (23c) と矛盾することを聞き手は教えられ、したがって (23b) の推意を破棄するよう指示される。一方 (22b)「のに」の場合も、(23a) から推意を導出するという推論的道筋を共にしている。つまり「のに」は「けど」と同等の手続きを記号化しているといえる。しかし、「のに」は (23b) とは異なる (24) のような、話し手の信念・思考を担う高次の表示を導出さ

せ、これが後続発話と矛盾することを聞き手は推論すると主張したい。

- (24) 「のに」節からの推意：話し手は「会社を辞められるであろう」と信じている。

我々は誰しも、自分の信念が成就されなければ、当然ながら意外・残念に思うものである。「のに」節の推論プロセスの結果、「話し手の失望」あるいは「被害者意識」とでも言うべき、話し手の心的態度が伝達されることになると考えられる。つまり「のに」は「けど」と同様、先行発話Pの推意P'と後続発話Qとの間に矛盾関係を有することを伝えるのであるが、推意P'と後続節Q間の矛盾を伝える「けど」とは対照的に、その矛盾関係は先行発話と関係づけられる想定P'に対する聞き手の信念と後続節Qとの間に生じるものと説明される。

後続発話がない、「のに」の文末使用の場合も同様の分析が可能である。

(4) の「のに」の例をもう一度見てみよう。

- (4) b.朝ご飯の仕度ができたのに。

(25) a. 「のに」節命題表示：朝ご飯の仕度ができた。

b.メタ心理的高次表示：話し手は「聞き手は今、朝食を食べる」と信じている。

c.非明示的状況的想定：「聞き手は今、朝食を食べない」

「のに」の使用は、聞き手に(25b)を推意として導出させるとともに、この想定と矛盾する想定(25c)をコンテキストから検索させ、それが話し手の信念と干渉することを伝える。すなわち話し手が伝えたいことは、「のに」節からの推意に対する自分の信念が、状況的想定(25c)によって叶わないということなのである。

「のに」の使用によって、先行発話と関連のある想定に対する話し手の

信念が矛盾関係の対象となるように聞き手に指示するという本稿の主張は、後続発話のモダリティ付加にある種の制約を課すという、さらなる示唆も与える。(26) のペアを比較してみよう。

(26) a.路面が凍っているのに／けど、車を運転する。

b.路面が凍っている*のに／けど、車を運転していいよ／運転しろ／運転しよう。

(26a) は「のに／けど」どちらも容認可能である。(26a) 「のに」の使用は、先行発話から話し手の心的表示「路面が凍っているのだから、車を運転すべきではないと信じている」を聞き手に呼び出させ、聞き手はそれが話し手にとって成就されない想定であると推論する。さらに、危険な状況での運転を危惧する話し手の感情をも読み取ることになろう。しかし、(26b) のように、話し手が「路面が凍った状況で車を運転する」という想定を許可・命令・勧誘したいとするコンテキストでは、話し手は「けど」を使用し、「のに」の使用を避ける。このことは、話し手がまったく反対の信念を抱くといった、いわゆる語用論的な衝突を引き起こすからであろう。後続発話の想定に反する信念を抱いている話し手は、後続発話の想定を許可したり、命令したりすることはないのである。それゆえ、(27) のような対話のやりとりでは、「のに」の使用が認められる。

(27) A：車を運転していいよ／運転しろ／運転しよう。

(Aの許可／命令／勧誘)

B：路面が凍っているのに？

(Bの信念)

「運転する」ことを許可しているのはAであり、「車を運転すべきではない」と信じているのはBであるから、(26b) のような語用論的衝突が生じないと考えられる。Bの「のに」の使用は、「運転すべきではないと信じている」という想定をBに伝え、それでもAの発した「運転すること」を許可、命

令、勧誘するののかというBの意外・不安な感情を伝えることになるのである。

「のに」は話し手の信念が関与していることを見てきた。「のに」節から導き出される想定に対する信念が成就されないものであると聞き手に解釈されることで、結果として話し手の残念感が伝わるのである。さらに、「のに」節に話し手の信念が関与することにより、「のに」は後続発話つまり主節のモダリティに制約を課す表現であることも示した。

4-2. 「のに」発話の関連性

最後に、「のに」発話がいかにして関連性を達するかについて、「けど」発話と比較しながら考えてみたい。(3) のペア例をもう一度見てみよう。

- (3) a. 鈴木さんは関西出身なのに、標準語を話します。
 b. 鈴木さんは関西出身だけど、標準語を話します。

真理条件は (3a) (3b) 共に同一であり、先行発話と後続発話との間に何らかの矛盾関係を伝達するという面でも等価である。しかしながら、両者の違いはPとQどちらが前景 (foreground) / 背景 (background) であるかをポイントするという点であり、言い換えれば、どちらが話し手の結論として、よりアピールしたい命題であるかという点にあると主張する。

武内 (2003) は、「けど」は「PけどQ」において先行発話から導かれた想定P'を削除するのではなくこれを保持し、それをコンテキストとして取り込み、その上でQ節を処理せよという手続き的意味を有する言語表現であると分析している¹¹⁾。この分析に従うと、(3b) は先行発話から導かれる推意P'「関西出身ならば、標準語を話すのだろう」をコンテキストとして、その中でQ節「鈴木さんは標準語を話す」を処理することで関連性を有すると説明される。一方、(3a)「のに」発話においては、「鈴木さんが標準語を話す」ということは、当該のコンテキストにおいて、話し手にとって

既に顕示的想定なのであり、この想定の中で「鈴木さんは関西出身である」ことが処理されると本稿は分析する。このことは、関連性理論では後続節Qを背景化し、「のに」節Pを前景化することである。言い換えれば、話し手が「のに」を用いるのは、後続節Qの命題「鈴木さんは標準語を話す」が、すでに話し手にとって知っている事象であると聞き手に思わせることである。したがって、話し手のより訴えたいことは帰結節ではなく、むしろ「のに」節にあるということなのである。この点で、「のに」と「けど」は、解釈の方向において対照を成すといえよう。

「のに」の文末使用で、この主張をさらに例証する。(4)をもう一度見てみよう。

(4) (出かけようとしている息子に対して)

a. 朝ご飯の仕度ができたのに。

b. 朝ご飯の仕度ができたけど。

(4)において、Qは明示的ではないが、コンテキストとして、顕示的想定「息子は朝食をとらないで出かけようとしている」がある。(4a)の「のに」の使用は、聞き手に「仕度ができているのだから、息子は朝食を食べると信じる」といった想定P'を呼び出させるが、この文脈想定が「朝食をとらないで出かけようとしている」という顕示的想定と矛盾することを伝える。「のに」は、いったん非明示的想定を聞き手に検索させ、それを背景情報として「のに」発話の解釈にあたるよう指示する手続きを有しているといえるであろう。一方「けど」の使用も、「けど」節から想定P'を呼び出させるのであるが、「けど」は、P節を背景情報とすること、つまり呼び出した想定P'をコンテキストに取り入れるよう聞き手に指示する。そして、それを結論への前提とした上で、非明示的顕示的想定「朝食をとらないで出かける」を話し手の結論であることを推論させるのである。このように、「けど」節を背景化し、非明示的想定が話し手のより訴えたいことであることを指示することによって「けど」は関連性を有するのであるが、この

ことは「けど」発話のみでは話者の意図伝達が未完であるという直感をも説明することになろう。

話し手が聞き手にたどるよう指示する推論の道筋は、非明示的な場合も含め、P、Qともに、話し手が伝達しようとしていることではある。しかし、「のに」節の表出命題が話し手の訴えたい結論として聞き手に復元することを意図している。対照的に「けど」発話は「けど」節の表出命題が前提となって、推論によって復元する「けど」節に続く想定の方が、話し手のより訴えたい結論として聞き手に復元してもらいたいと話し手は意図しているのである。

本稿の分析は、(6)のような「のに／けど」交換不可能な例によって、さらに支持されよう。

(6) A：あの二人は別々の人と結婚しようとしているのよ。

a.B：(二人は) 愛し合っているのに。

b.B：？(二人は) 愛し合っているけど。

本稿の分析が正しければ、話し手が訴えようと意図している想定は、(6a)の「のに」においては、「のに」発話そのものである。加えて、愛し合っているのに結婚しないことが極めて不条理であるという話し手Bの感情をも復元するのである。対照的に(6b)の「けど」発話では適切な認知効果をもたらさない。「けど」を用いることによってBが伝えたいのはAによる先行発話「別々の人と結婚しようとしている」となるが、それがすでにAの発話によって背景化され、コンテキストの中に存在しているからである。「けど」が容認されにくいのはこの理由によると考えられる。

結論として、「Pのに／けどQ」において、話し手はP、Qとも伝達される命題内容ではあるが、「のに」は主節つまり後続発話Qを背景情報とし、「のに」節の命題が話し手のよりアピールしたい内容であることを聞き手に指示するものである。一方の「けど」は、Q節と矛盾するPからの想定P'を背景情報とし、Q節の命題を話し手の結論としてより訴えたいと

いうことを聞き手に指示するものである。

5. おわりに

本稿では「のに」の持つ意味として以下の2つを提示する。一つは、「のに」はメタ心理的機能を有する表現であり、その認知効果として先行発話からの想定P'に対する聞き手の信念が達成されないことを伝える表現であること、二つ目は、「のに」は、Q節を背景情報として捉えた上で、P節からの推意P'を処理するよう指令する手続き的意味を持つことである。したがって、話し手の残念な気持ちが伝達されることと、「のに」節に話し手のアピールしたいことが置かれるのである。このことは「のに」が文末助詞的機能を持つという直感が説明されることになる。本稿は、文中、文末の「のに」発話の持つ関連性を一様に、説得的に説明することができたと思う。

*本稿は「第8回日本語用論学会」での研究発表に修正、加筆を施したものである。発表の準備段階から熱心な指導と有用なコメントをくださった武内道子先生、および口頭発表時にご指摘くださった方々に心より感謝申し上げます。なお、本稿に不備があるとすれば、その責任は全て筆者にある。

注

- 1) この直感は、「のに」が文末助詞的な機能を有する一つの証拠でもある。
- 2) 「矛盾」というのは二者命題間に生じる論理学的概念である。本稿では便宜上、話者の信念と命題間の相反する関係も「矛盾」と呼ぶことにするが、本稿が真に主張するところは、後続発話の事象によって、話者の信念が叶わないことを意味することに注意されたい。
- 3) 前景 (foreground) / 背景 (background) 情報は、伝統的研究における前提/焦点などに代わる概念である。詳しくはSperber&Wilson

(1986/95) を参照。

- 4) この点で、武内は「けど」の意味を、P'をさらに削除するよう指示する談話連結語「でも」と異なると述べている。

参考文献

- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. 2000. Procedurals and indicators: 'nevertheless' and 'but'. *Journal of Linguistics*. 36. 3. 463-86.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Pragmatics and Semantics of Discourse Markers*. Cambridge: CUP.
- Carston, R. 1988. "Explicature and truth-theoretic semantics." In R. Kempson (ed.) *Mental representations: The interface between language and reality*. Cambridge: Cambridge University Press, 155-81. Reprinted in A. Kasher (ed.), *Pragmatics: Critical concepts*. London: Routledge. 436-464.
- Carston, R. 2002. *Thought and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Grice, H P. 1975. Logic and Conversation. In Cole, P. & Morgan, J. (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. Academic Press.
- 松井智子. 2004. 「語用論から見た言語の進化」『月間言語〈言語の起源〉再考－新たなアプローチの提案』6月号. 31-37. 東京：大修館書店.
- Sperber, D. 2000. Metarepresentations in an Evolutionary Perspective. Sperber, D. (ed.) *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, 117-137. Oxford: Oxford University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986/95. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- 内田聖二. 1998. 「(の)だ」－関連性理論からの視点－』『現代英語の語法と文法』243-251. 東京：大修館書店.

- Takeuchi, M. 1998. Conceptual and Procedural Encoding: Cause-Consequence Conjunctive Particles in Japanese. Rouchota, V. and A H. Jucker (eds.) *Current Issues in Relevance Theory*.82-103. Amsterdam:John Benjamins.
- 武内道子. 2002. 「言語形式の明示性と表意」 『英語青年』第48巻 第4号 240-241 (2002年7月号36-37).
- Takeuchi, M. 2003. Japanese Consessives KEDO and DEMO in Utterance-Initial Use. ms.
- Wilson, D. 2000. Metarepresentation in Linguistic Communication. *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*. Sperber, D. (ed.) 411-448.Oxford : Oxford University Press.
- Wilson, D. & D, Sperber. 1993. Linguistic form and relevance. *Lingua* 90, 1-25.